

「源氏物語における『けり』の用法・一」

吉 岡 曠

源氏物語の「けり」について調査したことを報告する。調査の方針は次の通りである。

- 一 「けり」の用法をできるだけ細かく分類・整理することを目的とし、原義その他にはわたらない。
- 一 源氏物語の「けり」の全用例を対象とする。ただし、チェックもれが相当数ある見込みなので、全用例の九五%ぐらいを対象とした調査と考えていただければありがたい。
- 一 会話・心内語・和歌・消息文中の「けり」と地の文の「けり」とを別個に考察する。本稿はそのうち前者についてのみ報告である。

一 テキストは、角川文庫「源氏物語」全十巻を用いる。

一 どこからどこまでを会話ないしは心内語と認めるかで、テキストと私見とで見解を異にする場合がある。そのような場合は私見にしたがって処理した。また源氏物語では、会話ないしは心内語と地の文との境い目が必ずしも分明でない箇所がある。そのような箇所も私見にしたがって、会話ないしは心内語と認めた方が適当と思われる

るものはそのように処理した。以上。

はじめに、「けり」の用法について現在一般にどのように考えられているか、いくつかの所説を参照してみよう。

(「助詞助動詞詳説」・学燈社)

(1) 「来あり」がつづまってできたという点を原義と考えれば、「以前から、しつづけありつづけて、今もある」という意を述べる。

語りつぎ言ひつがひ計理(万葉集、八九四)

かくのみにあり家流君を衣ならば下にも着むと吾が思ひ家留(同、二九六四)

これらの例がそれにあたる。単なる回想だけでは、理解できない。

(2) 確実とは断定できかねるが、過去にあった事実を回想して述べる。これが、「き」と対比される用法である。話し手の体験ではない事実にふれているが多い。

昔、男ありけり(伊勢物語)

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり(竹取物語)

(3) そうとは気がつかなかったが、今、あらためて、それを知り(知らされ)、心を動かしていることを述べる。

人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり(万葉集、四五二)

見渡せば柳桜をこきませて都ぞ春の錦なりける(古今集、卷二)

過去の事実についての詠嘆と言いかえることができようか。

(4) いわゆる詠嘆で、ある事実を目の前にしての心の動きを述べる。

ある時はありのすさびに憎かりきなくてぞ人は恋しかりける(源氏物語、桐壺)

(3)に対して、現在の事実に対する詠嘆と言いかえることができる。

〔時代別・国語大辞典・上代編〕・三省堂

① 過去の事実、過去から継続して存在した事実、または現在の事実を、その存在や意義や理由などが、いまにおいてははっきり認識されるにいたった、という形で述べるのに用いる(用例省略、以下同じ)。② ①のような意味からして、いまそのことに気づいたという詠嘆・驚嘆の気持を含めて述べるのに用いられることも多い。

③ 非体験の、伝聞した事実を述べるのに用いる。

〔古語辞典〕・岩波書店

「けり」は、「そういう事態なんだと気がついた」という意味である。気づいていないこと、記憶にないことが目前に現われたり、あるいは耳に入ったときに感じる、一種の驚きをこめて表現する場合が少なくない。それ故「けり」が詠嘆の助動詞だといわれることもある。しかし「けり」は、見逃していた事実を発見した場合や、事柄からうける印象を新たにした時に用いるもので、真疑は問わず、知らなかった話、伝説・伝承を、伝聞として表現する時にも用いる(用例省略)。

「助詞助動詞詳説」が四類に、「時代別国語大辞典」が三類に、「古語辞典」が二類に、それぞれ「けり」の用法を分類しているが、「詳説」の(1)は、挙げられている用例そのものが原義の継続の意のみで他の意をふくまないかどうか疑問である。また、「詳説」の(3)と(4)〔時代別〕の①と②との区別も、「旅にまさりて苦しかり」「都ぞ春の錦なり」がなぜ「現在の事実」ではないのか、「なくてぞ人は恋しかり」がなぜ過去から現在まで継続している一般的な事実すなわち「過去の事実」ではないのか疑問であり、「詳説」と「時代別」とではそれぞれを区別する

根拠にずれがあることからいっても、両者(3)と(4)あるいは①と②の間に本質的な差異を認めることは困難でもあれば、不必要でもあろう。つまり「古語辞典」のように、「けり」の用法には、気づきないしは確認の用法と伝聞回想の用法があると二本立てで理解しておくのが穏当ではないかと思う。

私は「けり」の用法についておおよそ右のようにおおまかに理解した上で調査に取りかかったが、調査の結果、源氏物語の「けり」の用法をこころみに次のように分類してみた。

A 気づきないしは確認の「けり」。

B 非体験ないしは不確実な事柄を回想する「けり」。

B 1 故事・伝説・伝承を表現する「けり」。

B 2 非体験の伝聞した事柄を回想する「けり」。これはさらにイ、ロの二類に細分しうる。

B 3 非体験ないしは不確実な事柄を推定する「けり」。

C AともBとも両様に解釈される中間的な「けり」。これもC 1、C 2の二類に細分しうる。

D 若干の注意すべき用法。

A、Bの両グループが「けり」の用法の骨格的なものであることを再確認したが、Bグループをさらに三類に下位分類したこと、B 2グループをさらに二類に細分したこと、A、Bの中間的性質の「けり」を一グループとして立てたことなどが、本調査のいわばみそである。なぜみそであるかは後述する。

Aグループ九四六例、B 1グループ六〇例、B 2・イグループ一六五例、B 2・ログループ一三例、B 3グループ九八例、C 1グループ四二例、C 2グループ三二例、Dグループ五九例、その他〇、計一三八五例である。

二

Aグループ(気づきないしは確認の「けり」)は、全用例を列記する必要もないと思うので、角川文庫の第一巻すなわち桐壺巻から若紫巻までの用例を見本として列記し、第二巻以下は、角川文庫本の巻数と頁数と行数とでその所在を示しておく。

1 かかる人も世に出でおはするものなりけりとあさましきまで、目をおどろかし給ふ(二八)。

2 かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり(二九)。

3 なきあとまで人の胸あくまじかりける、人の御おぼえかな(三一)。

4 宮は大殿ごもりにけり(三四)。

5 わが御心ながら、あながちに人目おどろくばかりおぼされしも、長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契りになむ(三五)。

6 命婦は、まだ大殿籠らせ給はざりけると、あはれに見奉る(三六)。

7 かくても月日はへにけりと、あさましうおぼしめさる(三七)。

8 相人はまことにかしこかりけり、とおぼして(四二)。

9 よくさまざまなるものどもこそ侍りけれ(五二)。

10 わがものとうち頼むべきをえらむに、多かる中にも、えなむ思ひ定むまじかりける(五六)。

11 静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼みどころには思ひおくべかりける(五八)。

12 いであな悲し、かくはたおぼしなりにけるよ(五九)。

13 ひたすらに憂しとも思ひ離れぬ男、聞きつけて、涙おとせば、使ふ人ふるごたちなど、「君(男)の御心はあ

はれなりけるものを……」など言ふ(五九〇六〇)。

14 のどやかに見しのばむよりほかに、ますことあるまじかりけり(六一)。

15 げにかうもしつばかりけりと(六一)。

16 うはべの筆きえて見ゆれど、今ひとたび取り並べて見れば、なほじちになむよりける(六二)。

17 思いめぐらせば、なほ家路と思はむ方は又なかりけり(六五)。

18 この女の家、はたよぎぬ道なりければ(六八)。

19 ふところなりける笛とり出でて吹きならし(同右)。

20 よくなる和琴を、調べ整へたりける、うるはしく掻き合はせたりしほど(同右)。

21 琴のねも月もえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける(同右)。

22 うちらはらふ袖も露けきとこなつに嵐ふきそふ秋も来にけり(七一)。

23 つらきをも思ひ知りけりと見えむは(同右)。

24 あはれ絶えざりしも、やくなき片思ひなりけり(七二)。

25 これなむ、えたもつまじく頼もしげなきかたなりける(同右)。

26 世の道理を思ひとりて、恨みざりけり(七四)。

27 げに、のちに思へば、をかしくもあはれにもあべかりける事の(七六)。

28 ひとつふたつの節はすぐすべくなむあべかりける(七七)。

29 これに、たらず、又さしすぎたることなくものし給ひけるかな(同右)。

30 されど、けどほかりけり(八二)。

- 31 げにこそめでたかりけり(同右)。
32 いといぎたなかりける夜かな(八五)。
33 身のうさを嘆くにあかであくる夜はとり重ねてぞねも泣かれける(八六)。
34 みし夢をあふ夜ありやと嘆くまに目さへあはでぞ頃もへにける(八八)。
35 とてもかくても、今はいふかひなき宿世なりければ(九一)。
36 人に似ぬ心ざまの、なほ消えず立ちのぼれりける、とねたく(九二)。
37 おぼしこりにける、と思ふにも(九四)。
38 いで、このたびは負けにけり(九七)。
39 これをつらねてありきける、と思ひて(一〇二)。
40 かかるありきは、かるがろしくあやふかりけり、といよいよおぼし懲りぬべし(同右)。
41 幼なかりけり、とあはめ給ひて(同右)。
42 伊予の介に劣りける身こそ、など(同右)。
43 うつせみの身をかへてけるこのもとなほ人がらのなつかしきかな(一〇三)。
44 げに、これぞなのめならぬかたはなべかりける(一一二)。
45 かくてのみはいと苦しかりけり(一一一)。
46 この世とのみは思はざりけり(一二二)。
47 心づくしなることにもありけるかな(一二三)。
48 御ともに人もさぶらはざりけり(同右)。

- 49 けうとくもなりにける所かな(一二四)。
- 50 ゆふ露にひもとく花は玉ぼこのたよりに見えしえにこそありけれ(同右)。
- 51 光ありと見し夕がほのうは露はたそがれ時のそらめなりけり(一二五)。
- 52 見捨てて行きあかれにけり、とつらくや思はむ(一三三)。
- 53 あやしう短かかりける御契りにひかされて(一四〇)。
- 54 かく長かるまじくてなりけり(一四四)。
- 55 年ごろ、慣らひ侍りけること(同右)。
- 56 このかたの御好みには、もて離れ給はざりけり、と思ひ給ふるにも(同右)。
- 57 我なりけり、と思ひ合せば(一四六)。
- 58 逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖のくちにけるかな(一四九)。
- 59 蟬のはもたちかへてける夏衣かへすを見てもねは泣かれけり(同右)。
- 60 かく人知れぬことは苦しかりけり、とおぼし知りぬらむかし(一五〇)。
- 61 あやしうもあまりやつしけるかな(一五二)。
- 62 かしこに女こそありけれ(同右)。
- 63 いとよう似奉れるがまもらるるなりけり、と思ふにも(一五七)。
- 64 けふしも端におはしましけるかな(一五八)。
- 65 御とぶらひにもまうでざりける(同右)。
- 66 よくさるまじ人をきも見つくるなりけり(同右)。

130	83	23	(二)	67	さらばその子なりけり、とおぼし合はせつ(一六二)。
16	2	6	(上段の数字は頁数、下段は行数)	68	えなむ承りとどめられざりける(一六四・五)。
131	97	31		69	いという衰へにけり(一六九)。
16	6	13		70	公に知ろしめされざりけること(同右)。
132	97	33		71	なほいと心憂き身なりけり、とおぼし嘆くに(一七四)。
10	11	1		72	とぶらふべかりけるを、などかきなむとものせざりし(一七七)。
153	111	36		73	あはれにゆかしう覚え給ふも、契りことになむ心ながら思ひ知られける(一八一)。
12	7	12		74	あしう言ひてけり、とおぼして(同右)。
155	112	36		75	ものおちし給はざりけり(一八三)。
8	12	13		76	今は、なき人となり給ひける、とおぼすがいみじきに(一八六)。
156	114	40		77	あらざりけり、とあきれて(一八九)。
13	1	13			以上。
162	118	41			
7	4	10			
166	118	43			
3	14	2			
166	120	46			
9	8	15			
176	122	57			
9	10	2			
181	124	63			
7	1	17			
184	125	68			
4	4	10			
185	126	68			
12	15	14			
186	127	69			
1	1	2			
186	127	70			
2	6	16			
186	128	71			
7	9	15			
186	130	80			
8	7	4			

「源氏物語における『けり』の用法・一」(吉岡)

(五)				(四)						(三)				
94 2	63 9	38 10		183 16	152 14	127 11	88 4	56 15		186 9	136 7	98 13	51 10	
94 3	63 10	39 14	25 3	186 11	154 5	128 10	88 11	56 15	22 12	189 7	141 10	100 9	53 4	22 14
94 4	65 7	40 7	28 2	187 8	154 6	131 10	91 8	57 4	27 8	190 9	141 13	100 11	55 9	25 1
94 11	65 8	41 4	28 5		154 6	134 16	93 10	57 13	32 2	191 13	145 1	100 13	59 12	26 1
94 14	67 8	41 10	28 6		154 10	140 7	96 11	57 15	40 15	194 16	145 1	101 13	60 11	27 12
94 15	67 9	45 8	29 13		156 14	140 11	96 12	67 3	42 12	195 11	152 5	110 2	64 14	28 6
94 15	71 9	45 13	30 16		163 3	142 11	96 16	72 13	43 3	196 1	153 1	111 5	69 2	29 10
96 7	72 9	46 6	31 12		165 3	143 13	104 9	77 9	46 6	196 8	153 2	112 5	70 5	30 1
97 7	73 3	50 1	31 16		165 3	145 6	104 10	77 13	46 9	200 6	153 2	114 5	72 2	31 1
98 3	75 3	51 4	32 11		165 4	146 10	104 15	81 16	50 12		159 13	115 7	75 7	32 13
98 12	76 12	53 3	33 4		165 6	147 16	109 10	82 5	51 13		165 2	115 7	76 4	32 15
100 14	76 13	53 4	33 8		171 1	148 2	109 11	84 3	52 2		168 10	119 2	78 13	38 8
104 2	84 4	55 5	35 10		174 10	149 1	114 2	84 15	52 3		178 11	120 8	81 3	38 9
105 13	87 11	58 15	36 1		174 11	149 9	123 10	85 1	53 3		183 2	122 10	90 13	38 15
107 4	90 8	58 16	36 3		178 7	149 10	127 3	87 6	53 4		185 7	123 6	92 15	45 10
107 6	90 16	59 8	36 7		178 10	150 13	127 7	88 3	56 12		186 4	127 3	93 12	48 3
107 9	91 9	62 16	38 9		183 14	150 14	127 8	88 3	56 15		186 8	136 5	97 1	51 4

「源氏物語における『けり』の用法・一」(吉岡)

(イ)										(ウ)				
143	113	66	44		188	165	147	113	87	60		182	143	108
14	9	1	6		6	6	16	2	15	1		4	11	7
144	114	66	44	19	188	167	148	113	90	61	17	183	147	108
2	2	12	12	6	7	1	5	6	7	3	15	2	6	15
144	114	72	45	24	188	168	148	113	91	61	18	189	152	109
7	14	7	16	12	9	8	16	8	10	13	14	13	8	6
144	116	73	47	30	188	169	149	116	93	64	22	192	153	109
14	9	3	13	3	15	4	3	14	3	2	10	3	7	16
145	116	74	47	32	191	169	150	120	93	66	27		154	112
7	17	9	17	11	2	11	12	1	17	3	1		14	5
145	117	81	48	34	191	170	150	132	94	66	35		156	112
11	12	12	1	9	15	4	13	4	2	16	15		8	13
146	127	82	48	37	193	178	151	135	94	68	37		162	112
5	15	13	9	2	14	2	3	9	3	5	8		4	16
146	129	87	48	37	196	178	153	136	94	68	37		162	113
9	15	5	14	13	2	7	11	4	12	9	16		5	2
149	130	87	49	38	196	179	154	136	94	71	43		162	113
1	6	6	4	2	7	9	3	8	13	2	7		9	8
150	132	87	49	39	196	180	156	139	95	71	43		166	113
3	3	8	8	14	9	11	1	10	17	4	9		7	16
161	132	96	49	39	199	180	156	139	98	77	48		168	118
8	6	12	10	13	13	14	4	10	14	13	5		4	3
161	134	101	50	39	202	181	156	141	100	77	48		169	119
9	3	11	9	14	5	2	7	9	6	15	14		12	15
164	137	102	51	40		182	159	144	100	80	52		174	123
7	7	5	16	14		3	14	7	8	8	3		2	16
166	138	104	52	41		183	160	145	105	81	55		176	137
14	1	8	3	11		3	6	12	1	10	9		5	10
169	138	104	61	42		185	161	145	105	85	55		179	142
8	13	10	6	9		13	5	14	9	6	10		8	7
170	139	105	64	42		186	163	147	106	86	55		180	142
10	6	12	12	14		4	1	6	3	7	12		3	12
170	140	108	65	43		186	164	147	107	87	56		180	143
10	7	8	7	13		10	5	7	14	12	7		3	8

「源氏物語における『けり』の用法・一」(吉岡)

(ウ)										(V)									
165	146	119	82	55		239	218	180	140	115	72		188	172					
17	6	10	2	3		12	3	4	10	8	8		10	5					
168	146	120	82	57	19	240	220	182	143	116	78	27	188	176					
2	11	3	3	4	1	4	13	1	9	14	1	12	12	9					
168	146	122	83	59	21	240	225	187	149	119	81	29	190	176					
5	15	2	1	7	8	13	11	13	14	3	12	15	2	15					
168	147	124	88	60	22	243	226	189	150	121	83	37	190	176					
13	14	6	2	1	3	2	7	10	1	13	2	15	9	15					
170	148	124	91	61	23	247	226	192	154	122	86	43	191	177					
1	8	6	7	5	16	3	12	4	10	1	6	12	2	6					
171	148	124	91	63	25	249	227	192	157	124	86	44		177					
1	9	7	8	1	4	8	12	6	6	2	10	8		6					
172	150	124	97	63	26	250	227	192	157	124	92	47		177					
16	5	11	6	14	14	2	16	9	7	4	1	9		12					
173	150	131	98	64	32	250	228	194	157	124	96	49		180					
7	17	9	8	2	1	6	12	7	9	11	4	9		4					
174	155	134	99	66	32	250	228	195	157	125	98	57		181					
12	2	6	9	6	9	10	14	7	10	6	2	10		12					
180	159	134	106	72	36	250	229	196	158	126	110	58		181					
9	16	14	12	14	9	12	10	6	10	5	6	11		14					
186	160	135	106	74	36	253	232	201	160	126	110	64		183					
11	8	16	13	14	17	15	13	2	2	7	15	16		4					
	162	136	111	74	45	253	234	201	162	126	111	65		184					
	1	3	4	15	5	16	1	10	1	16	6	1		10					
	163	137	113	75	46	254	234	201	163	128	111	65		184					
	5	16	2	7	6	5	15	15	15	1	11	14		12					
	163	138	113	77	48	257	237	204	164	128	111	65		185					
	13	1	12	14	16	5	1	12	2	7	16	15		11					
	164	139	113	78	51		238	205	172	133	113	65		187					
	9	13	13	12	13		16	12	8	2	15	15		11					
	165	141	117	81	53		239	210	172	133	114	71		187					
	16	9	15	3	15		6	11	11	3	8	13		12					
	165	144	119	81	53		239	216	175	135	114	72		188					
	17	6	8	4	16		9	4	5	10	16	4		4					

						(十)
	187 3	158 16	126 4	95 5	43 3	
	187 17	159 8	126 9	95 16	43 14	19 5
	189 11	163 14	126 16	97 2	45 7	21 6
	193 6	164 15	128 12	99 2	45 9	22 7
	194 13	167 17	130 13	99 3	55 12	23 1
三	195 6	168 2	131 9	99 7	56 2	26 5
	196 11	168 9	135 9	100 10	56 4	32 13
	196 12	169 4	137 4	108 6	58 14	33 13
	198 4	171 15	137 5	111 11	61 11	33 13
	198 9	175 12	141 4	111 15	67 6	33 15
	199 7	175 12	146 10	112 7	67 9	34 2
	204 13	179 13	148 1	113 9	69 2	36 2
	206 16	182 9	148 7	113 12	72 9	37 9
	211 16	182 10	152 11	115 8	75 12	37 15
	214 12	184 1	154 3	118 17	85 3	38 5
	215 8	185 10	154 4	120 3	85 6	40 11
		186 7	157 1	120 13	94 8	42 13

三

B 1グループ(故事・伝説・伝承等を表現する「けり」)については、私の認知しえた全用例を次に列記する。
(括弧内の数字は、上が巻数、下が頁数)

1 もろこしにも、かかる事の起りにこそ、世も乱れ、あしかりけれ、と(一・二五)。

2 人知りたることよりも、かやうなるは、あはれも添ふこととなむ、昔人も言ひける(二・一〇一)。

3 かやうの所にこそは、昔物語にもあはれることどももありけれ(二・二二)。

4 「霞も人の」とか、昔も侍りけることにや(二・一六五)。

5 かの須磨は「昔こそ人の住みかなどもありけれ、今は、いと里離れ心すぐて、海人の家だにまれに」など聞き給へど(三・二二)。

6 いにしへの人もまことに犯しあるにても、かかることにあたらざりけり。なほ、さるべきにて、ひとのみか

どにもかかるたぐひ多く侍りけり。されど、言ひ出づるふしありてこそさることも侍りけれ(三・二五)。

7 から国に名を残しける人よりもゆくへ知られぬ家ゐをやせむ(三・三九)。

8 昔のかしき人だに、はかばかしう世にまたまじらふことかたく侍りければ(三・六二)。

9 ひとのみかだにも、夢を信じて国を助くるたぐひ多う侍りけるを(三・七一)。

10 退きて咎なしとこそ、昔そのさかしき人も言ひ置きけれ(三・七二)。

11 嵯峨の御伝へにて、女五の宮、さる世の中の上手にものし給ひけるを(三・七八)。

12 商人の中にてだにこそ、ふるごと聞きはやす人は侍りけれ(三・七九)。

13 ひとの国にも、事移り世の中定まらぬ折は、深き山にあとを絶える人だにも、をさまれる世には、白髪も恥ぢず出で仕へけるこそ、まことのひじりにはしけれ(三・一〇六)。

14 (かぐや姫は) この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のことこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけめど、もしきのかしき御光には並ばずなりにけり(三・一七〇)。

15 俊蔭は、激しき波風におぼれ知らぬ国に放たれしかど、なほさして行きけるかたの心ざしもかなひて…、名を残しける古き心をいふに(同右)。

16 世の静かならぬことは、必ずまつりごとのなほくゆがめるにもより侍らず。さかしき世にしもなむ、よからぬことども侍りける。ひじりの帝の世に、横さまのみだれ出でてくること、もろこしにも侍りける(四・三九)。

17 「さきさきかかることのためしはありけりや」と、問い聞かむとぞおぼせど(四・四〇)。

18 春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人あらそひ侍りける、その頃のげにと心よるばかりあらはなる定めこそ侍らざなれ(四・四四)。

- 19 こまのの物語の絵にてあるを……、「かかる童とちだに、いかにされたりけり……」(五・三三)。
- 20 「来まさば」と言ふ人も侍りけるを(五・四〇)。
- 21 交野の少将は、紙の色にこそ、ととのへ侍りけれ(五・七五)。
- 22 家高う人の覚え軽からで、家の営みたてたらぬ人なむ、いにしへより(尚侍に)なり来にける(五・八六)。
- 23 昔物語などを見るにも、世の常の心ざし深き親だに、時にうつろひ人に従へばおろかにのみこそはなりけれ(五・一三三)。
- 24 女のことにてなむ、賢き人、昔も乱るるためしありける。さるまじきことに心をつけて、人の名をも立て、自らも恨みを負ふなむ、遂のほだしとなりける(五・一六八)。
- 25 身の上になりぬれば、ことたがひて心動き、必ずその報い見え、ゆがめることなむ、いにしへだに多かりける(六・一九)。
- 26 昔も、かうようなる選びには、何事も人に異なる覚えあるに、事よりてこそありけれ(六・二八)。
- 27 いにしへのためしを聞き侍るにも、世を保つ盛りの御子にだに、人を選びて、さるさまのことをし給へるたぐひ多かりけり(六・三七)。
- 28 四十の賀といふことは、さきざきを聞き侍るにも、残りのよはひ久しきためしなむ少なかりけるを(六・七二)。
- 29 昔の世にも、かやうなる古人は罪許されてなむ侍りける(六・八〇)。
- 30 「女は春をあはれぶ」と古き人の言ひ置き侍りける、げにさなむ侍りける(六・一三九)。
- 31 (琴を)まことに跡のままに、たづねとりたる昔の人は、天地をなびかし……、宝にあづかり、世に許さるる

たぐひ多かりけり。こめ国に弾き伝ふるはじめつかたまで……、身をなきになして、このことをまねび取らむと惑ひてだに、しうるはかたくなむありける。……雲いかつちを騒がしたるためし、あがりたる世にはありけり。……かの鬼神の耳とどめ、かたぶきそめにけるものなればにや、なまなまに学びて、思ひかなはぬたぐひありけるのち……、今はをさをさ伝ふる人なしとか(六・一四一〜二)。

32 帝の御めをもあやまつたぐひ、昔もありけれど(六・一八一)。

33 人の御名をも立て、身をもかへり見ぬたぐい、昔の世にもなくやはりありける、と思ひなほすに(七・二三)。

34 「ほかなるものは」とか、昔もたぐひありけり、と思う給へなすにも(七・一〇三)。

35 仏のかくれ給ひける御なごりには、阿難が光放ちけむを、ふたたび出で給へるかと疑ふさかしきひじりのありけるを(八・四六)。

36 君に仕うまつることは、それが心安きこそ、昔より興あることにはしけれ(八・七九)。

37 かかる御まじらひの安からぬことは、昔より、さることとなり侍りにけるを(八・九〇)。

38 入る日をかへすばちこそありけれ(八・一一〇)。

39 いにしへの人も、さるべき程は、へだてなくこそならはして侍りけれ(八・二三〇)。

40 近き世に花ふらせたるたくみも侍りけるを(九・九二)。

41 昔、別れを悲しびて、屍を包みてあまたの年頸にかけて侍りける人も、仏の御方便にてなむ。かの屍の袋を捨てて、つひいひじりの道にも入り侍りにける(九・九八)。

42 なにがしのみこの、この花めでたる夕ぞかし、いにしへ天人のかけりて、琵琶の手教へけるは(九・一〇五)。

43 香のかうばしきをやむごとなきことに、仏の宣ひおきけるもことわりなりや(九・一五四)。

44 愛右のひじりだに、時に従ひては出でずや^{ありける}(九・一七七)。

45 昔は、懸想する人の有様の、いづれとなきに思ひわづらひてだにこそ、身を投ぐるためしも^{ありけれ}(十・七四)。

46 女の道にまどひ給ふことは、人のみかだにも、古きためしども^{ありけれど}(十・八八)。

47 絵にかきて、恋しき人見る人は、なくやは^{ありける}(十・一二一)。

48 昔ありけむ目も鼻もなかりけるめ鬼にやあらむ(十・一四二)以上。

源氏物語では、故事、伝説、伝承等について言う場合には「けり」を用いるという原則は厳密にまもられていて、私の気づいたかぎりでは、当然この種の「けり」を用いるべきところに「き」の使用されている例は、右の15の、

俊蔭は、激しき波風におぼれ知らぬ国に放たれし^{かど}(総合・一七〇)。

と、宇治の中の君の会話中に出てくる、

「世の憂きよりは」など、人は言ひし^{をも}(宿木・五五)。

の二例しかない。この二例の中でも前者は、物語総合せの席上、宇津保物語を推賞するあまりに作中人物と一体化してしまったような、右方の女房の熱中した口吻を伝える、意識的な誤用と考えることもできよう。

なお、右の諸例の中で、文末に位置する「けり」は一見して気づきの「けり」と受けとられかねないものもある。しかし、この種の「けり」がこれだけの数存在すること、例外がきわめてわずかであることから言って、右の諸例中の文末の「けり」も、やはり基本的には「故事・伝説・伝承等を表現する『けり』と理解すべきであろうと思う。

四

B2グループ(非体験の伝聞した事柄を回想する「けり」のイ系列とは、たとえば次のようなものである。

1 (夕顔が)かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりし頃、この見給ふるあたりより、情なくうたてあることをなむ、さるたよりありて、かすめ言はせたりける、のちにこそ聞き侍りしか、(一・七〇)。

帚木巻の頭中将の会話の一節で、夕顔のところにしばらく御無沙汰していた間に、本妻の右大臣の四の君方から夕顔のもとへ何か意地わるなことを言つて寄こしたというのである。「のちにこそ聞き侍りしか」とあるので、「この見給ふるあたりより」以下が伝聞した事実であることは明らかである。頭中将が直接体験した事柄については、「久しくまからざりし頃」「聞き侍りしか」と「き」が使用されていて、「き」と「けり」との使いわけがはっきりと認められる。

つまり、普通に伝聞回想の「けり」と呼ばれるもので、このグループについても全用例を列記する必要があるまい。角川文庫本の第五巻まで、つまり藤裏葉巻までの全用例を紹介し、若菜上巻以降は巻数・頁数・行数によってその所在を示しておく。なおこのグループの場合、前後の物語をよく知らないと、それがなぜ伝聞であるのか、引例の文だけではわかりにくいのも多いと思う。不審があれば直接本文にあたられたい。

(一)

2 これ(小君)は故衛門の督の末の子にて、いとかなしく侍りけるを(八〇・紀伊守詞)。

3 大弐の乳母のいたくわづらいて、尼になりける、とぶらはむ、とて(一〇五・源氏心)。

4 「阿闍梨ものせよと言いやりつるは」と宣ふに、「昨日山へまかりのぼりにけり」(一三一・惟光詞)。

5 いまはのきざみに、つらしとや思はむ、と思う給へてまかれりしに、その家(五条の乳母)なりける下人の病しけるが、俄に出であへでなくなりけるを、おち憚りて、日を暮してなむ取り出で侍りけるを、聞きつけ侍りしかば(一三四・源氏詞)。

6 (明石入道は)大臣の後にて、出でたちもすべかりける人の、世のひがものにて、まじらひもせず、近衛の中將をすてて申し賜はれりけるつかさなれど……、「なにのめいばくにてか、またみやこにも帰らむ」と言ひて、かしらもおろし侍りにけるを(一五三・良清詞)。

7 さいつごろまかりくだりて侍りしついでに、ありさま見給へに寄りて侍りしかば、(明石入道は)京にてこそ所えぬやうなりけれ、そこら遙かに、いかめしう占めてつくれるさま、さは言へど、国のつかさにてしおきけることなれば、残りのよはひゆたかにふべき心がまへも二なくしたりけり(一五四・良清詞)。

8 源氏の中將の、わらはやまじなひにもし給ひけるを、只今なむ聞きつけ侍る。いみじうしのび給ひければ、知り侍らで(一五八・北山の僧都詞)。

9 よぎりおはしましける由、ただ今なむ人申すに(一五九・北山僧都詞)。

10 兵部卿の宮なむ、(紫上の母に)忍びて語らひつき給へりけるを(一六一・北山僧都詞)。

(二)

11 (末摘花の)父親王の、さやうの方にいとよしづきてものし給うければ(二〇・源氏詞)。

12 かうこの中將(頭中將)の言ひありきけるを、(末摘花は)言多く言ひなれたらむかたにぞなびかむかし(二二六・源氏心)。

13 (藤壺が内裏に)入らせ給ひにけるを、珍らしきことうけたまはるに(一六二・源氏詞)。

14 （源氏と朧月夜の仲は）ありそめにけることなれば、さも心かはさむに似げなかるまじき人のあはひなりかし（一六三・朱雀帝詞）。

15 昔も、（朧月夜が源氏に）心許されて、ありそめにけることなれど、人柄によるづの罪を許して、さても見むと言ひ侍りし折は、心もとどめず（一八一・右大臣詞）。

（三）

16 国王（桐壺帝）すぐれて（桐壺更衣を）ときめかし給ふこと並びなかりけるほどに、人のそねみ重くて、うせ給ひにしかど（五八・明石入道詞）。

17 （源氏は）昔よりすきすきしき御心にて、なほざりに通ひ給ひけるところどころ、みな思し離れにたなり（一四五・末摘花の叔母詞）。

18 （明石姫君は）ひるの子がよはひにもなりにけるを、罪なきさまなるも思ひ捨てがたうこそ（二〇〇・源氏詞）。

（四）

19 （明石御方は）幸にうち添へて、なほあやしうめでたかりける人なりや（八二・内大臣∥頭中将詞）。

20 思はずなること（夕霧と雲居雁との恋愛）の侍りければ、いと口惜しうなむ（八六・内大臣∥頭中将詞）。

21 あはれと思ひし人（夕顔）の物うじして、はかなき山里に隠れ居にけるを、幼き人のありしかば、年頃も人知れず尋ね侍りしかども（一四六・源氏詞）。

22 母（夕顔）もなくなりけり（一四六・源氏詞）。

23 （末摘花が）常陸の親王の書き給へりける、紙屋紙の冊子をこそ、見よとておこせたりしか（一五三・源氏

詞)。

24 かれ(玉鬘への恋文)は、しうねうとどめてまかりにけるにこそ。内の大殿の中将(柏木)の、このさぶらふ
みるこそぞ、もとより見知り給へりけるつたへにて侍りける(一七九・右近詞)。

(五)

25 この春の頃ほひ、(父内大臣||頭中將が)夢話し給ひけるを、ほの聞き伝へ侍りける女(近江の君)の、我な
むかこつべきことあると、名乗り出で侍りけるを、中將の朝臣(柏木)なむ聞きつけて、まことに、さやうに触
ればひぬべきしるしやある、と尋ねとぶらひ侍りける(三八・弁の少將詞)。

26 妙法寺の別当大徳の、産屋に侍りける、あえものとなむ(母が)嘆き侍りたうびし(五一・近江の君詞)。

27 女官なども、おほやけごとを仕うまつるに、たづきなく事乱るるやうになむありけるを(八六・冷泉帝詞)。

28 「かの大臣(頭中將)もさやうになむおもふけて、大將(髭黒)のあなたさまの便りに、気色ばみたりける
に、いらへ給ひける」(二一〇・夕霧詞)。

29 いと賢くかどあることとなりとなむ、喜び申されけると、確かに人の語り申し侍りしなり(二一一・夕霧詞)。

(ハ)	(ヒ)	(ヘ)
	193 13	
82 14	49 9	22 13
115 1	73 7	77 14
115 2	73 8	92 13
158 14	99 13	94 4
224 14	99 14	135 11
	104 4	138 10
	104 8	155 15
	132 8	156 2
	132 9	156 7
	137 15	156 8
	153 3	156 9
	170 4	159 15
		170 11
		182 10
		185 15
		190 9

			(十)		(九)
194	125		149	100	
4	5		9	14	
194	125	23	151	100	54
11	6	13	9	14	9
194	125	27	155	100	54
14	7	3	2	16	10
198	125	29	155	101	54
16	11	8	3	1	10
201	125	38	157	101	54
3	13	14	8	1	11
204	125	62	163	101	54
2	14	11	11	2	13
204	125	66	163	101	54
8	15	9	13	3	15
205	135	85	174	124	94
2	8	16	2	9	16
205	139	92		124	100
3	6	13		9	8
205	176	94		133	100
7	8	2		12	8
205	176	98		138	100
10	10	7		1	9
205	178	101		139	100
15	5	8		4	10
206	182	107		139	100
4	9	9		6	10
209	185	115		140	100
14	16	9		6	11
211	189	124		140	100
7	15	16		12	11
	191	125		142	100
	1	2		9	12
	194	125		147	100
	4	3		9	13

五

B2グループ(非体験の伝聞した事柄を回想する「けり」の口系列とは、たとえば次のようなものである。

1 「……病に沈みて返し申し給ひける位を、世の中変りて、また改め給はむに、さらに咎あるまじう」公私定めらる(三・一〇六)。

濡標巻の一節で、朱雀帝退位後、致仕の大臣(左大臣)を復位させようという朝廷の意向に対して、左大臣が「病によりて、位も返し奉りてしを、いよいよ老のつもり添ひて、さかしきこと侍らじ」と辞退するのを受けて、この一節がくる。つまり、この場合は左大臣と「公私」とのやりとりでやや異例だが、多くの場合、対話の場ないしは和歌の贈答などで、相手から聞いたことをそのままおうむ返しにくり返して言うような場合に用いられる「けり」である。伝聞回想の一種だが、伝聞の出所が目の前の対話者である点がB2・イと異なっている。用例数もあまり多くないので、全用例を列挙する。

- 2 (玉鬘詞「足たたず沈み、そめ侍りにけるのち、何事もあるかなきかなむ」を受けて) 源氏詞・沈み給ひけるを、あはれとも今はまた誰かは(四・一四八)。
- 3 (柏木歌「いもせ山深き道をば尋ねずてをだえの橋に踏み迷ひける」を受けて) 玉鬘歌・惑ひける道をば知らでいもせ山たどしくぞたれもふみ見し(五・一一四)。
- 4 (源氏詞「かの(故紫上の)心ざしおかれたる極楽の曼陀羅など、このたびなむ供養すべき。経などもあまたありけるを、なにがし僧都、みなその心くはしく聞きおきたなれば、また加へてすべきことどもも、かの僧都の言はむに従ひてなむものすべき」を受けて) 夕霧詞・かやうのこと、もとよりとりたてて思ひおきてけるは、うしろやすきわざなれど云々(七・一八八)。
- 5 (中の君詞「(宇治行は)この月は過ぎぬめれば、ついたちの程にも、とこそは思ひ侍れ。ただいと忍びてこそよからめ」を受けて) 薫詞・あらずや、しのびてはよかるべく思ふこともありけるがうれしきは、ひがみみか云々(九・七六)。
- 6 (弁尼詞「女子(浮舟)をなむ産みて侍りけるを、(八の宮が)さもやあらむ、と思ふことのありけるからに、あいなくわづらはしくものしきやうに思しなりて、またとも御覧じ入ることもなかりけり」を受けて) 薫詞・(八の宮は浮舟を)数まへ給はざりけれど、近き人にこそはあなれ(九・一〇一)。
- 7 (薫歌「宿りきと思ひいずはこのものと旅寝もいかに寂しからまし」を受けて) 弁尼歌・荒れはつる朽木のもとを宿りきと思ひおきけるほどの悲しさ(九・一〇二)。
- 8 (仲人の話を受けて) 常陸守詞・(求婚者の少将が)なにがしを取りどころに思しける御心は、知り侍らざりけり(九・一三四)。

9 (同右) 常陸守詞・うひうひしくおぼえ侍りてなむ、参りもつかまつらぬを、かかる御心ざしの侍りけるを
(九・一三五)。

10 (時方詞「東山にひじり御覧じに、となむ人にはものし侍りつる」を受けて) 右近詞・ひじりの名をさへつけ
聞こえさせ給ひてければ云々(十・三九)。

11 (北の方から浮舟矢跡の話を聞いて) 常陸守詞・いとめでたき御幸を捨てて、失せ給ひにける人かな(十・一
一四)。

12 (妹尼文「浮舟が」さすがに今日までもあるは、死ぬまじかりける人を。つきしみ領じたる物の去らぬにこ
そあめれ」を受けて) 横川の僧都詞・いとあやしきことかな。かくまでもありける人の命を、やがてとり捨てて
ましかば(十・一四七)。

13 (小君の話を聞いて) 妹尼詞・かくいとあはれに心苦しき御ことどもの侍りけるを、今なむ、いとかたじけな
く思ひ侍る(十・二一七)。

たった一三例ほどしか見つからないものをわざわざ一グループとして立てた理由は後述する。

六

B3グループ(非体験ないしは不確実な事柄を推定する「けり」とは、たとえば次のようなものである。

1 荒き風ふせぎしかげの枯れしよりこはきがうへぞしづところなき(桐壺更衣の母北の方歌) などやうにみだり
がはしきを、(桐壺帝は)心をさめざりけるほどと御覧じ許すべし(一・三七)。

母北の方を見舞ったゆげひの命婦が帝に復命するくだりである。私は一応B3グループに入れたが、この例など

は、すぐ前に「(帝は命婦に)いとこまやかにありさま問はせ給ふ。あはれなりつること、しのびやかに奏す」とあって、命婦からの伝聞の「けり」とも、あるいは、帝に対するものとしては内容上不穏当な歌を見た帝が、北の方はまだ気持が落ち着いていないのだったと、改めて確認した「けり」とも解釈する余地があるかもしれない。しかし、

2 この女のあるやう、もとより思ひいたらざりけることにも、いかでこの人のためにはと、無き手を出だし云々
(一・六三)。

などは、伝聞でもなければ気づきでもないことははっきりしているし、「もとより思ひいたらざり」というのは「き」を使って確言すべき性質の事柄でもない。そしてこの種の用例によって「けり」の推定の用法というものが認められるとすれば、1の「心をさめざりけるほど」なども推定の用法と考えるのがもっとも適当であろう。Bグループの用例は相当数あるが、他書にあまり指摘がないようなので、煩をいとわず全用例を掲げることにする。

(一)

3 火ほのかに壁にそむけ、なえたるきぬどものあつごえたる、大いなる籠にうちかけて、ひきあぐべき物のかた
びらなどうちあげて、こよひばかりやと待ちけるさまなり(六六)。

4 かれがれにのみ見せ侍るほどに、しのびて心かはせる人ぞありけらし(六七・八)。

5 せうそなどもせで久しく侍りに、(女は)むげに思ひしをれて、心細かりければ、をさなき者などもあり
しに、思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし(七〇・一一)。

6 (女が)つれなくてつらしと思ひけるも知らで、あはれ絶えざりしも、やくなき片思ひなりけり(七二)。

7 数ならぬ身ながらも、おぼしくたしける御心ばへの程も、いかが浅くは思ふ給へざらむ(八四)。

8 「もし受領の子どもの好き好きしが、頭の君におち聞えて、やがてゐて下りにけるにや」とぞ思ひよりける(一四八)。

9 (紫上が) 人の程だに物を思ひ知り、女の心かはしけることとおしはかられぬべくは、世の常なり(一八八)。

10 (二) かざしける心ぞあだにおもほゆる八十氏人になべてあふひを(九七)。

11 「……まことにやむごとなく重き方は、ことに思ひ聞え給ひけるなめり」と、見知るに(一一六)。

12 またかかること(源氏と臘月夜との密通)さへ待りければ、さらにいと心憂くなむ、思ひなり待りぬる(一八一・右大臣詞)。

13 (三) われ(桐壺帝)は位にありし、時あやまつことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふる程いとまなくて(六九)。

14 (朱雀院が) めでたしと思ほししみにける(秋好の)御かたち、いかやうなるをかしきにか(一六六)。

15 (四) (源典侍が) 生きとまりて、のどやかに行ひをもうちして過ぐしけるは、なほすべて定めなか世なり(五九)。

16 あさはかなる筋などもてはなれ給へりける人(月朧夜)の御心を。あやしくもありけることどもかな(六五・紫上詞)。

17 (大宮が) 幼き人々(夕霧と雲居雁)の心に任せて御覧じ放ちけるを、心憂く思ふ給ふる(八七・内大臣

詞)。

18 いろいろに身のうきほどの知らるるはいかに染めける中の衣ぞ(九七)。

19 (源氏は)さしも深き御心ざしなかりけるをだに、落しあぶさず、取りしたため給ふ御心長さなりければ(一二七)。

(五)

20 (物語について)またいとあるまじきことかなと見る見る、おどろおどろしくとりなしけるが目おどろきて(三〇)。

21 神代より世にあることを、記し置きけるなり(三一)。

22 (近江の君のことは)ことごとしく、さまで言ひなすべきことにも侍らざりけるを(三八・内大臣息男弁の少将詞)。

23 (源氏は思ひ寄らぬ隈なくおはしける御心にて、もとより見馴れおほしたて給はぬは、かかる御思ひ添ひ給へるなめり(七二・夕霧心)。

24 いかに。いかに侍りけることにか(八七)。

25 (玉鬘が源氏に)かうまで御覧ぜられ、ありがたき御はぐくみに隠ろへ侍りけるも、前の世の契りおろかならじ(九九・内大臣詞)。

26 右近はほの気色見けり。いかなりけることならむとは、今に心えがたく思ひける(一四七)。

27 わざと使ひさされたりけるを、早うものし給へ(一二四)。

28 浅き名を言ひ流しける河口はいかが漏らしし関の荒垣(一二八)。

29 漏りにけるくきだの関を河口の浅きにのみはおほせざらなむ(同右)。

30 いかに心置かせ給へりけるにか(一八八)。

31 いかならむ折にか、その御ばへほころぶべからむと、世人もおもむけ疑ひけるを(一九・朱雀院詞)。

32 (源氏は) 仮りにても見そめ給へる人は、御心とまりたるをも、又さしも深からざりけるをも、方々につけて

尋ね取り給ひつつ(二四)。

33 さるべきにて、しばしかりそめに身をやつしける昔の行ひ人にやありけむ(一二二)。

34 すべていはけなき御ありさまにて、人(柏木)にも見えさせ給ひければ(一七九・女三宮に対する小侍従詞)。

35 (玉鬘と髭黒は) ちぎり深き中なりければ、長くかくてたまたむことは、とてもかくても同じごとあらましものから(一八六)。

(七)

36 (女三宮が源氏を) つれなくて、恨めしと思すこともありけるにや、と見奉り給ふに(二三三)。

37 いかなる讒言などのありけるにかと、これなむこの世のうれへにて残り侍るべければ(三三九)。

38 あやしく、なべての世すさまじう思ひ給ひけるなりけり、と思ひ出で給ふに(四〇)。

39 (女三宮が) おどろおどろしき御悩にもあらで、すがやかに思し立ちける程よ(四五・夕霧心)。

40 年頃忍びわたり給ひける心の内を、聞え知らせむとばかりにや侍りけむ(一〇五)。

41 律師とは思ひも寄らで、しのびて人の聞えける、と思ふ(一〇五・六)。

42 上にこの御事はのめかし聞えける人こそ侍るべけれ（一〇七）。

43 暗うなりにし程の空の氣色に、御心地惑ひにけるを、さる弱目に、例の御物の怪の引き入れ奉るとなむ見給へし（一二六）。

44 「されども年へにけることを、音なくけしきももらさで過ぐし給うけるなり」とのみ思ひなして（一三七）。

45 故御息所は、いと心強うあるまじきさまに言ひ放ち給うしかど、かぎりのさまに御心地の弱りけるに、また見ゆづるべき人のなきや悲しかりけむ、なからむのちの後見にとやうなることの侍りしかば（一三九）。

46 何事も今はと見あき給ひにける身なれば、今はたなほるべきにもあらぬを、何かはとて（一五〇）。

47 ……とのみあるを、思しけるまま、とあはれに見る（一五三）。

48 かくはかなかりける身を惜しむ心のまじりけるにや（一六一）。

49 いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく、仏などのすすめ給ひける身を、心強く過ぐして（一六九）。

50 品高くななどは掟てざりける花にやあらむ（一八一）。

51 いかなりけることにかは（三〇）。

52 かく思はずなりけることの乱れに、必ず憂しとおぼしなる節ありけむ（同右）。

53 あやしう、さきの世の契りいかなりける報いにかと、ゆかしきことにこそあれ（五〇）。

54 我よりも年の数つもりほけたりける人のひがごとく（五二）。

55 ひとかずにも侍らぬ身なれど、人に知らせず、御心よりはたあまりけることを、折々うちかすめ宣ひしを（一

一五)。

56 御心よりあまりて思しける時々(一二六)。

57 年ごろよからぬ人の心をつけたりけるが、人をはかりごちて、西の海の果てまで取りもてまかりにしかば(一二七)。

58 中納言は、一人ふし給へるを、心しけるにや、とうれしくて(一九二)。

59 かの御心ざしはことに侍りけるを(二〇一)。

60 かく思し構ふる心の程をも、いかなりけるとかは推しはかり給はむ(二〇二)。

61 きまざまに思し構へけるを、色にも出だし給はざりけるよ(二〇四)。

62 いとどなほなほしきを、思しけるまま、と、待ち見給ふ人は、ただあはれにぞ思ひなされ給ふ(二〇九)。

(九)

63 また人になれける袖のうつりがをわが身にしめてうらみつるかな(八三)。

64 むすびける契りことなる下紐をただひとすぢにうらみやはする(八六)。

65 宮の忍びて物など宣ひけむ人の、しのぶ草つみ置きたりけるなるべし(九四)。

66 とまり給はむ人々思しやりて、えさはおきて給はざりけるにや(九七)。

67 おぼつかなく絶えこもりはてぬるは、こよなく思ひへだてけるなめり(九九)。

68 こまかにはあらねど、「人も聞きけり」と思ふに、少将の思ひあなづりけるさまなどはめかして(二四九)。

(十)

- 69 心をかはして隠し給へりけるも、いとねたう、おぼゆ(二六)。
 70 けしき見奉れば、道にていみじきことのありけるなめり(三五)。
 71 それは見給へず、こと方より出だし侍りにける(六六)。
 72 女は今の方にいまし心寄せまさりてぞ侍りける(七〇)。
 73 御心みだれけるなるべし(八九)。
 74 「さは、このいと荒ましと思ふ川に、流れうせ給ひにける」と思ふに(九一)。
 75 (浮舟は)宮(匂宮)をめぐらしくあはれと思ひきこえても、わが方(薫)をさすがにおろかに思はざりける
 ほどに……、この水の近きをたよりにて、思ひ寄るなりけむかし(一〇九)。
 76 母のなほかるびたる程にて、のちの後見もいとあやしく、ことをぎてしなしけるなめり、と(一一〇九)。
 77 わがゆかりにいかなることのありけるならむとぞ思ふらむかし(一一〇)。
 78 おろかにもあらざりける人を、宮にかしこまり聞えて、隠しおき給ひたりける、いとほし、と思しける(一一
 五)。
 79 明石の浦は心にくかりける所かな(一二三五)。
 80 もし、死にたりける人を捨てたりけるがよみがへりたるか(一二四一)。
 81 なにか、物にけどられにける人にこそ(一二四三)。
 82 物詣などしたりける人のこちなどわづらひけむを、継母などやうの人の、たばかりて置かせたるにや(一二四
 七)。
 83 さすがに今日までもあるは、死ぬまじかりける人を。つきしみ領じたる物の去らぬにこそあめれ(同右)。

- 84 されど、観音、とさまかうさまにはぐくみ給ひければ(一四九)。
- 85 姫君の立ち出で給へりつるうしろでを見給へりけるなめり(一五八)。
- 86 さるべき昔の契りありけるにこそ、と思う給へて(一七七)。
- 87 仏なども教へ給へることも侍るうちに、ことし来年すぐしがたきやうになむ侍りければ(一八四)。
- 88 君ぞことごと聞き合はせける(一九八)。
- 89 さて、さな宣ひそ、など聞こえおき給ひければや(二〇〇)。
- 90 いかなりけることにかと、心えず思されぬべきに(二〇四)。
- 91 かくまで宣ふは、かろがろしくは思されざりける人にこそあめれ(同右)。
- 92 天狗木だまなどやうのものの、あざむきてゐて奉りたりけるにや(二〇五)。
- 93 なほ、この領じたりけるものの、身に離れぬこちなむする(二〇六)。
- このB3グループの存在は、Bグループを一口に伝聞回想の「けり」と呼ぶことがあまり適当でないことを物語っている。Bグループの三類に共通するのは、伝聞という要素ではなく、非体験ないしは不確実という要素であつて、私がBグループを「非体験ないしは不確実な事柄を回想する『けり』」と名づけたゆえんである。この用法が「き」の用法に対応するものであることは言うまでもない。

七

Cグループ(AともBとも両様に解釈される中間的な「けり」とは、次のようなものである。

- 1 「いづかたにつけても、人わろくはしたなかりける(み物語かな」とて、うち笑ひおはさうず(一・七〇)。

2 残りを言はせむとて、「さてさてをかしかりける女かな」と、すかい給ふを(一・七四)。

雨夜の品定めのだりで、前者は左馬の頭の長広舌を受けた源氏の言葉、後者は式部の丞の体験談を受けた頭中将の言葉だが、いずれも、対話の場で、対話者の話を受けて、その話の内容について、対話者に向って発言している点で、先のB2の口に酷似している。しかし、発言の内容が対話者の話の趣旨ないしは言葉をもう一度そのまゝくり返すといったものではなく、対話者の話についての感想であり批評でもあるという点で、おのずから気づきないしは確認の「けり」的要素もそなえている。次のような例もある。

6 さしぐみに袖ぬらしける山水にすめる心は騒ぎやはする(一・一六五)。

「吹き迷ふ山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな」という源氏歌に対する北山の僧都の返歌だが、「さしぐみに袖ぬらしける」は、源氏歌の「涙もよほす」についての僧都の立場からの解釈である。僧都の立場からの解釈である以上、単なる伝聞ではありえない。以下、この種の「けり」の全用例を列記する。

(一)

3 なかなかおしなべたるつらに思ひなし給へるなむ、うたてありける(八四)。

4 不用なるよしを聞ゆれば、「あさましくめづらかなりける心のほどを。身もいと恥づかしくこそなりぬれ」と、いといとほしき御気色なり(九二)。

5 ……と聞ゆれば、「あいなかりける心くらべどもかな」(一四一)。

6 前掲(一六五)。

7 嵐吹く尾上の桜散らぬ間を心とめけるほどのかなさ(一七二)。

(三)

8 琴を琴とも聞き給ふまじかりけるあたりに、ねたきわざかな(七八)。

9 ここにかう弾きこめ給へりける、いと興ありけることかな(同右)。

10 などかは、かくさだかに思ひ知り給ひけることを今までは告げ給はざりつらむ(八一)。

11 いたよう思し寄りけるを(一三三)。

12 捨て侍りにし世を今さらに立ち帰り思ひ給へ乱るるを、おしはからせ給ひければ、命長きのしるしも思ひ給へ

知られぬる(一九二)。

13 松も昔のとたどられつるに、忘れぬ人もものし給ひけるに頼もし(一九六)。

(四)

14 そこにはかく忍び残されたることありけるをなむつらく思ひぬる(三六)。

15 心に知らで過ぎなましかばのちの世までの咎めあるべかりけることを、今まで忍びこめられたりけるをなむ、

かへりてうしろめたき心なりと思ひなりぬる(三七)。

16 げにかくも思し寄るべかりけることを(七三)。

17 げにあはれなりけることかな。年頃はいつくにか(一四一)。

18 げにかかる人のおはしけるを、知り聞えざりけるよ(一四六)。

(五)

19 その気近く入り立ちたりけむ大徳こそはあぢきなかりけれ(五二)。

20 尚待あかば、なにがしこそ望まむと思ふを、非道にも思しかけけるかな(一〇〇)。

- 21 いとまがまがしき筋にも思ひ寄り給ひけるかな(一一一)。
 22 いかならむ色とも知らぬ紫を心してこそ人は染めけれ(一四三)。
 23 げにただ人よりも、かかる筋は、わたくしさまの御後見なきは口惜しげなるわざになむ侍りける(三六)。
 24 女の御為に何ばかりのけざやかなる御心寄せあるべきにも侍らざりけり(三七)。
 25 いとむくつけきことをも思し寄りけるかな(一五七)。
 26 こなたかなたあきらめ申すべかりけるものを、今は言ふかひなしや(三九)。
 27 かの想夫恋の心ばへは、げにいにしへのためしにもひきいでつべかりける折ながら(七二)。
 27 けり
 28 今日ぞ知る空をながむるけしきにて花に心をうつしけりとも(七四)。
 29 げに思ひ知り給ひけるたのみ、こよなかりけり(一一三)。
 30 それを思しわかざりけるこそは、浅きこともまじりたるこちすれ(一二二)。
 31 おくらさむと思しけるこそいみじく侍れ(二三六)。
 31 けり
 32 思ひのほかなりける御心の程かな(七七)。
 32 けり
 33 いとこよなく思しけるこそ、なかなかうたてあれ(同右)。

33 いと心うきことを聞こし召しけるにこそは侍るなれ(一〇八)。

34 恥づべきゆゑあらじと思ひさだめ給ひてけるこそくちをしけれ(一二一)。

35 あはれなりけることかな(一六〇)。

36 いとあやしきことをも制し聞こえ給ひける僧都かな(一六七)。

37 うきものと思ひも知らで過ぐす身を物思ふ人と人は知りけり(一七三)。

38 なほ、あやしと思ひし人のことに、似てもありける人の有様かな(一九九)。

39 聞えむかたなかりける御心の程かな(二〇一)。

以上は会話文の場合だが、次のように心内語の例もある。

1 (小君が)「(源氏は)たがふべくも宣はざりしものを、いかがさは申さむ」と言ふに、(空蟬は)心やましく、

「(源氏は小君に)残りなく宣はせ知らせてける」と思ふに、つらきこと限りなし(一・八九)。

2 (源氏が)「あこ(小君)は知らじな。その伊予のおきなよりはさきに見し人ぞ。されど頼もしげなく頸細し

とて、ふつつかなるうしろみまうけて、かくあなづり給ふなめり……」と宣へば、(小君は)「さもやありけむ。

いみじかりけることかな」と思へる、をかしとおぼす(同右)。

心中思惟の中に使用された「けり」だから、それだけ一步「気づきないしは確認の『けり』」に近ずいていると思うが、「いみじかりけることかな」と心の中で思ったことをそのまま口にしていたならば、前記のC1グループと全く同性質のものとなる。この種の「けり」も、C2グループとして、以下に全用例をあげておく。

3 「さればよ、言ひ寄りにけるをや」と、ほほゑまれて(二・二六)。

4 「人わきしける」と思ふに、いとねたし(同右)。

5 われはさはをとこまうけてけり（二・五六）。

6 「たはむれにても心のへだてありける」と思ひうとまれ奉らむは（三・八九）。

7 「かかりける御響も知らで、立ちいでつらむ」など思ひつづくるに（三・一二〇）。

8 「しか忍び給ひけむこと知りにけり」と、かの人にも思はれじ（四・四〇）。

9 のちに聞き給うては、へだて聞えけり、とや思さむ、など思ひ乱れて（四・一四〇）。

10 げに深く思しける人の名残りなめり、と見給ふ（四・一四九）。

11 ふと見知り給ひにけり、と思せど（五・二八）。

12 賢くもおぼい寄り給ひけるかな、とむくつけく思さる（五・一一一）。

13 ふすべ顔にてもものし給ひけるかな……と思ひて（五・一三六）。

14 わが身はげにうけばりていみじかるべき際にはあらざりけるを……など思し知りはてぬ（六・七八）。

15 ましてかう待ち聞え給ひけるが心苦しきこと、と参り給ふべきこと思しまうく（六・一二八）。

16 人よりことなる宿世もありける身ながら……など思ひ続けて（六・一五一）。

17 一夜のことを、心ありて聞き給うける、と思すに（七・一一四）。

18 聞しめさせたらば、いとど、いかにけしからぬ御心なりけり、とうとみ聞え給はむ（八・七二）。

19 なほ世に恨み残りける、といとほしく御覧ず（八・一〇三）。

20 なにかは、知りにけり、とも知られ奉らむ（八・一三〇）。

21 いと多く聞え給ふに、恥づかしくもありけるかな、とうとましく、かかる心ばへながらつれなくまめだち給ひけるかな、と聞き給ふこと多かり（八・一七九）。

22 さればよ、思ひうつりにけり、とうれしくて(八・二〇〇)。
 23 かくよろづにめづらかなりける御心の程も知らで、いふかひなき心幼さも見え奉りにけるおこたりに、思しあ
 なづるにこそはと、言はむかたなく思ひ給へり(八・二〇一)。

24 ましてこれは知られ奉らざりけれど、まことに故宮の御子にこそありけれ、と見なし給ひては(九・一二四)。
 25 さかしらにこれを取りおきけるよ、など漏り聞き給はむこそ恥づかしけれ(十・七五)。
 26 たしかにこそは聞き給ひてけれ、といといとはしくて(十・一〇八)。

27 人のいふを聞けば、多くの目ごろも経にけり(十・一五〇)。
 28 おのづから、世にありけり、と誰にも誰にも聞かれ奉らむこと、いみじく恥づかしかるべし(十・一五五)。

八

若干の特殊用法と思われるものを指摘しておく。

D 1 直接体験したはずの事柄の回想に、Bグループと思われる「けり」の使用される例。

1 いはけなかりける程に、思ふべき人々の、うち捨ててものし給ひにけるなごり、はぐくむ人あまたあるやうな
 りしかど、したしく思ひむづぶるすちは、またなくなむ思ほえし(一・一〇七)。

2 右近は、なくなりける御めのと(右近の母)の、捨ておきて侍りければ(一・一四四)

3 いふかひなき程のよはひにて、むつまじかるべき人にも、立ちおくれ侍りにければ(一・一六四)。

4 足たたず沈みそめ侍りにけるのち、何事もあるかなきかになむ(四・一四八)。

5 何事も思ひ知り侍らざりける程より、親などは見ぬものにならひ侍りて(四・一八一)。

6 人(他の兄弟)より先なりけるけじめにや、とりわきて(母を)思ひならひたるを、今になほかなしく給ひて(六・二〇一)。

7 かのいにしへの悲しきは、まだいはけなくも侍りける程にて、いとさしもしまぬにや侍りけむ(九・五五)。

8 いにしへ頼みきこえけるかげどもにおくれ奉りけるは、なかなか世の常に思ひなされて、見奉り知らずなりにければ、あるを(九・一四八)。

これらは、物心づかない幼年時代の回想だから「けり」が用いられているのである。

9 人より深き心ざしをむなしくなし侍りぬることと、動かし侍りにし心なむ、よろづ今はかひなきことと思う給へかへせど、いかばかりしみ侍りにけるにか、年月にそへて、口惜しくも、つらくも、むくつけくも、あはれにも、いろいろに深く思う給へまざるに(六・一六〇)。

10 むかし大将の君の御母君うせ給へりし時の暁を思い出づるにも、かれはなほ物の覚えけるにや、月の顔の明らかに覚えしを(七・一六八)。

右二例は、意識の及ばない領域の事柄についての回想である。

11 いと清げなる男の寄りきて、「いざ給へ。おのがもとへ」と言ひて抱くこちのせしを、宮と聞こえし人のし給ふと覚えし程より、ここちまどひにけるなめり(十・一五〇)。

12 あやくして生き返りける程に、よろづのこと夢のやうにたどられて(十・一五九)。

13 鬼の取りもて来けむほどは、ものの覚えざりければ、なかなか心やすし(十・一七四)。

右三例は、浮舟が物の怪に乗りうつられて意識を失っていた異常時の回想である。

14 さてうつし心もうせ、たましひなど言ふらむものも、あらぬさまになりけるにやあらむ(十・二一四)。

15 昔のこと思ひいづれど、さらにおぼゆることなく、あやしう、いかなりける夢にかとのみ、心もえずなむ(十・二一六)。

右二例も、浮舟が蘇生後の自分の異常な精神状態についてのべた言葉で、「けり」の使用されている理由は容易に納得できる。

16 昔も、あやしかりける身にて、心のどかにさやうのこと(琵琶の弹奏)すべき程もなかりしかば(十・一五四)。

浮舟が自分が常陸の田舎育ちであることをのべた言葉だが、「あやしかりける身」は当人が明瞭に自覚しきれる性質の事柄ではないから、「けり」が用いられているのである。

また、以下のような例などもこのグループに入れておいてもよいかもしれない。

17 年頃よろづに頼み聞えて、まづはし聞えけるこそ、あさましき心なりけり(二・一三〇)。

18 何にかく心づくしなることを思ひそめけむ。すべてひがひがしき人に従ひける心のおこたりぞ(三・九八)。

19 心の幼かりけることは、よろづに物つつましかりし程にて、え尋ねても聞えて過ぐしし程に(四・一三七)。

20 めでたきさまになまめい給へらむあたりに、ありあふべき身にもあらねば、いづちもいづちもうせなむとす。

なほかくだにな思しいでそ。あいなく年ごろを経けるだにくやしきものを(七・一四二)。

21 田舎びたるあたりにて、かうやうの筋のまぎれは、えしもあらじと思ひけるこそ幼けれ(十・六六)。

これらはいずれも自分の直接体験した事柄の回想だが、「き」を用いるかわりに「けり」を用いたことによって、「われながら気が知れない」というニュアンスをふくむ表現になっているのである。

D 2 継続の用法ではないかと思われる例。

先に、「助詞助動詞詳説」が、「けり」の用法の一つとして、「『来あり』がつづまってできたという点を原義と考えれば、『以前から、しつづけありつづけて、今もある』という意を述べる」という一項を立てていることを紹介した。こういう純粹に原義のみの用法というものが存在するかどうか、私はいまだに確信をもてないが、あるいはその種の用法ではないかと思われるものを列記しておく。

1 限りあらむ道にも、おくれ先だたじと契らせ給ひけるを、さりととも、うち捨ててはえ行きやらじ(一・二九)。
2 わがかうて(末摘花を)見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへ置き給ひけむ魂のしるべなめり(二・四〇)。

3 昔より人には思ひおとし給へれど、みづからの心ざしの又なきならひに、ただ御事のみなむ、あはれに覚えける(三・一〇四)。

4 近き程は怠る折ものどかに頼もしくなむ侍りけるを(三・一四五)。

5 にはかにまばゆき人中いとはしたなく、田舎びにけるこちも静かなるまじきを、ふるき所たづねてとなむ思ひ寄る(三・一八一)。

6 かくて年経給ひにけれど、殿のさやうなる御かたち、御心と見給ふて(四・一〇四)。

7 年頃も人知れず尋ね侍りしかども、え聞き出でなむ、をうなになるまで過ぎにけるを(四・一四六)。

8 限りなきかしこまりをば、世にためしなきことを聞えさせながら、今までかく忍びこめさせ給ひける恨みも、いかが添へ侍らざらむ(五・九七七八)。

9 年頃かくてはぐくみ聞え給ひける御心ざしを、ひがさまにこそ人は申すなれ(五・一一〇)。
10 思ほし捨てまじき人々も侍ればと、のどかに思ひ侍りける心の怠りを、返す返す聞えてもやるかたなし(五・

一三八。

11 その残りをなむ、御弟子ども六十余人なむしたしき限り候ひける、程につけて皆処分し給ひて（六・八六）。

12 世に経し時だに、人に似ぬ心ばへにより、世をもてひがむるやうなりしを、若きどち頼みならひて、おのおのはまたなく契りおきてければ、かたみにいと深くこそ頼みはべしか（六・八八）。

13 なほかくわざともあらぬ御遊びと、かねて思う給へたゆみける心の騒ぐにや侍らむ（六・一四〇）。

14 重き病者のはかにとじめつるさまなりつるを、女房などは心もえをさめず、乱りがはしくさわぎ侍りけるに、みづからもえのどめず、心あわただしき程にてなむ（六・一七〇～一）。

15 わが思ふやうにはあらぬ御気色を、事に触れつつ、年ごろ聞し召し思しつめけること、色に出でて恨み聞え給ふべきにもあらねば（七・三一）。

16 この二日三日ばかり見奉らざりける程の、とし月のこちするも、かつはいとはなくなむ（七・一〇八）。

17 いと今めかしくなりかはれる御けしきのすさまじさも、見ならはずなりにけることなれば、いとなむ苦しき（七・一一二）。

18 見し程よりは、かろびたる御心かな。さりともと思ひ聞えけるもいとほしく（八・二三八）。

19 心あさきやうなる御もてなしの、昔も今も心うかりける月ごろの罪は、さも思ひきこえ給ひぬべきことなれど（八・二五三）。

20 もし思ふやうなる世もあらば、人にまさりける心ざしの程、知らせ奉るべきひとふしなむある（九・六四）。

21 そのやまとこばだに、つきなくならひにければ、ましてこれは（九・一八八）。

22 御獄さうじしけるを、いたう老い給へる人の、重くなやみ給ふは、いかが（十・一三八）。

23 むかし聞き侍りしよりも、こよなく覚え侍るは、山風のみ聞きなれ侍りにける耳からにや(十・一六六)。

24 身には、かかる世の常の色あひなど、久しく忘れにければ、なほなほしく侍るにつけても、昔の人のあらましかば、など思ひ出で侍る(十・一九六・七)。

D 3 陰陽道関係の記事の「けり」。

これはAあるいはB 2・イとして処理しうるのだが、ちょっと目についたので、こゝでまとめて紹介しておく。

1 「今宵なか神、うちよりはふたがりて侍りけり」と聞ゆ。「さかし。例は忌み給ふかたなりけり云々」(一・七八)。

2 山里にうつろひなむとおぼしたりしを、今年よりはふたがりけるかたに侍りければ、たがふとて、あやしき所に物し給ひしを(一・一四二)。

3 この餅、かう数々に所せきさまにはあらで、明日の暮れに参らせよ。今日はいまいましき日なりけり(二・一二八)。

4 御服もこの月には脱がせ給ふべきを、日ついでなむよろしからざりける(五・一〇六)。

5 坎日にもありけるを、もしたまさに思ひ許し給はばあしからむ(七・一一五)。

6 今日よりのち、日ついであしかりけり(七・一二〇)。

7 九月にもありけるを、心うのわざや(九・一八二)。

8 なりあはぬ仏の御かざりなど見給へおきて、けふよろしき日なりければ、いそぎものし侍りて、みだりごちのなやましきに、ものいみなりけるを思ふ給へ出でてなむ、けふあすこにてつつしみ侍るべき(九・一八六)。

九

最後に結論めいたことを簡単にのべて終りとする。「けり」の用法に関して、気づき、確認の用法と伝聞回想の用法とが一般に認められていることははじめに言った。私がこの調査に先立って疑問に思ったことは、この二つの基本的用法の間の意味的なへだたりがあまりにも大きすぎるように思われたことである。「けり」という同じ一つの助動詞が、なぜ、「昔、男ありけり」というふうにも用いられ、「昔は物を思はざりけり」というふうにも用いられるのか。この疑問を解決する道はおそらく二つあるであろう。一つは、このかけはなれた二用法を同時に一望のもとにおさめられるような視点を見つけ出すこと、つまり「けり」の本義は何かということを考えて、この二用法のいずれをもふくみうるような有効な定義を考え出すことである。竹岡正雄氏の「あなた説」などはそういう方面でのところみといってよいであろう。もう一つは、もっと現象的な解決法で、二つの用法の間に梯子をかけることろみである。この調査で私がひそかに目的としたのは後者の道で、「けり」の用法を必要以上に細かく分類しようと心がけたのはそのためである。私の目的はどの程度達せられたであろうか。A、B、Cの分類を次のように並べなおしてみる。

- 1 かかる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで、目をおどろかし給ふ（一・二八、A）。
- 2 げに宮仕への筋にて、けざやかなるまじく紛れたる覚えを、賢くも思い寄り給ひけるかな、とむくつけく思さる（五・一一一、C2）。

- 3 「……と、確かに人の語り申し侍りしなり」と、いとうるはしきさまに語り申し給へば、げにさは思ひ給ふらむかしと思すにいとほしくて、「いとまがまがしき筋にも思ひ寄り給ひけるかな。いたり深き御心ならひならむかし……」と笑い給ふ（同右・C1）。

4 「足たたず沈みそめ侍りけるのち、何事もあるかなきかなむ」と、ほのかに聞え給ふ声ぞ、昔人にいとよく覚えて、若びたりける。ほほゑみて、「沈み給ひけるを、あはれとも今はまた誰かは」とて、心ばへいふかひなくはあらぬ御いらへと思す(四・一四八、B 2・ロ)。

5 かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりし頃、この見給ふるあたりより、情なく、うたてあることをなむ、さるたよりありて、かすめ言はせたりける、のちにこそ聞き侍りしか(一・七〇、B 2・イ)。

6 この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のことこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照しけめど、もしきのかしこき御光には並ばずなりにけり(三・一七〇、B 1)。

以上、「昔は物を思はざりけり」から「昔、男ありけり」まで、一本の糸でつながったと言えないだろうか。

(昭和五十一年九月稿)